



第197号

発行所 上高井教育会  
 発行人 上高井教育会理事長  
 山 岸 徹  
 編集人 会報編集委員長  
 斎 藤 章 子  
 印刷所 須坂新聞社

## 教育改革の節目「連係を保ち」に思う

宮入英俊

完全学校週五日制のもと新しい教育課程の全面実施をはじめとする様々な改革から一年が経とうとしています。完全学校週五日制に伴って夏期休業等をふくめた日々の研修のあり方など教師として自らの立つところについて、問われていると思います。

教育が大きく変わる時、定

款第三条「本会は会員相互の連係を保ち、その職能の向上をはかり教育発展に貢献することを目的とする」の四十一文字について改めて考えてみました。―会員相互の連係を保ち―連係ではなく連係を保ちの中に、長年にわたり先輩の先生方が、活力ある組織を願い築かれてきた深い想いがあるのではないかと思います。

子どもたちの意欲に応え、保護者や地域の方々の期待と信頼に応え得る教育をするには、受け身ではなく教育会の諸事業に自ら求めて積極的に参加し、自分の教育実践を通して教育に対する考えや教師

としてのあり方について互いに高め合って、自己の内を確かなものにしていくことが必要です。もし、これを失ったときに本会の活動、そして集いは何であるのか。当たり前といえは当たり前ですが、本会の立つところを明らかにし、会のあり方を示してくれていると思います。

教師の研修について、お世話になった校長先生から「人間誰しも始めのうちは牛に引かれて善光寺参りの気持ちである。朋友に引かれたり師に引かれたり、時にはお義理で修業の緒につく者が多いのではないか。それ故にかかる縁を自ら求め、牛(師)を見つめるように心がけるべきである。同時にその際牛(師)はすべからずつかい牛(真の正師)を見つめるのがよい」と、自ら師を求め、常に教育の本質を問い、自己を高めるための学び合いの大切さを教えていただきました。

今振り返ってみると、お世

話になった地で、講演会や同好会に参加してみないかと勧められたり、意見発表や委員等をさせていただきました。先輩の先生方との出会いや誘い、そして仲間との学び合い、また、多く機会を与えていただいたことが、それぞれの考え方や生き方に触れ、子どもを見る眼や教育に対する考え方、教師としてのあり方を育ててくれたと思います。

本校の中核活動

## 喜びと自信をくれた花壇づくり

小布施中学校

十四年度のFBC春花壇コンクールにおいて、本校は念願であった最優秀賞の大賞を受賞することができました。六月十八日、緑化委員長の小林剛君と顧問が、豊科町で行われた晴れの表彰式に行ってきました。

テレビ局のインタビューに小林委員長は、「秋花壇も是非、大賞をねらいたいです」と喜びを隠さずに答えていました。その願いもあり、FBC秋花壇コンクールでは「国土交通大臣賞」を受賞する事が出来ました。今までの苦勞も吹き飛んでしまったようです。

花壇づくり、花づくりの良い点は、苦勞が必ず報われるということかと思えます。夏の暑いさなかのつらい仕事も、冬の凍つく寒さの中での作業も、育てた花が開いたとき、その苦勞はいっぺんに吹き飛んでしまします。

競い合うように咲いているという表現もありますが、それぞれの花が精いっぱい咲いているだけとも見えます。どの花もそれぞれに美しい。「夢、忍耐、思いやり」という学校教育目標のもと



本校では、かけがえのない自分の生き方を、自信をもって

切り開いてほしいと願って教育活動に取り組んでいます。その中で、緑化委員会を中心にした花壇づくりは、学校教育目標具現への重要な一翼を担っています。そして間違いなく生徒たちに大きな成就感、満足感と自信をもたらししてくれます。学校の花壇は町の「オーブンガーデン」に指定され、小布施を訪れる観光客の皆さんも寄つてくれます。さらに町別生徒会がそれぞれの地域の花壇を管理しています。

小布施町や町教育委員会も、本校の実績を喜び讃え、応援してくれます。

ますます張り切つて、花の町づくりに中学生も参加しているという実感と誇りを持って、取り組んでいるところです。

(酒井 勉)

## 教育会だより

3 3 2 2 2 1 1 1 1 1 1 2 1 2  
 12 7 28 26 21 29 28 23 21 18 17 26 26

研究企画委員会  
 研究委員長会  
 研究委員会世話係・委員長会  
 第8回同好会  
 第7回研究小委員会  
 研究企画委員会  
 第2回同好会世話係・会長会  
 第7回理事会  
 第7回代議員会  
 第8回理事会  
 上高井教育会会報第197号発行  
 第8回代議員会  
 上高井教育会誌第59号発行

## 音楽

## 一、テーマ

自ら課題を持つて追究し表現の良さを感じ合い高め合う音楽学習  
く拍ののった音楽活動の楽しさを通して

## 二、テーマ設定の理由

本校の児童の実態と、これまでの音楽学習のあり方を振り返り、次の三点が重要でありと考え、このようなテーマを設定した。

- ①子ども達自らが、こうした、このようになりたい、と言う願いを持つこと
- ②その願いに向かって、一人ひとりが工夫しながら追究すること
- ③できるようになったこと、歌えるようになったことの良さを実感し、なぜそうできたかを振り返ることができること

## 三、実証授業

期日 一月二二日（金）

授業学級・授業者

二年竹組 竹内ゆかり教諭  
題材名『ミニ音楽会しよう』  
中心教材『ないた赤おに』  
本時の展開

(一) 歌の感じに合うリズムをつけることを確認し、楽器

日野小学校

千野 和江

を選び、リズムを考える場面  
「元氣な感じ」「やさしい感じ」といった、歌の様子に合わせて、楽器を選び、ばちを変えたり、打ち方を変えたりリズムを変えて演奏する姿があった。



(二) 一人ひとりが考えたりリズムをグループの中で発表したりしながら、グループとしてのリズムにするか相談する場面。

グループの相談では、どの子も、自分のものが一番よいと感じていて、なかなか一つにするのは大変なようだった。(三) 全体で聴き合い、工夫や良さを認め合う場面。他のグループでは、自分た

ちと同じ場面をどんな楽器で、どんなリズムでやっているのか、発表前から思わず足を止め聞き入る姿があった。

## 四、成果と課題

○堂々とひとり歌いをしながらリズム奏している子

## 特別活動

本校は、今年度から16年度までの三年間、文部科学省よりエイズ教育(性教育)の推進校の研究指定を受けました。本年度はその初年度ということであり、郡研の特別活動の発表校としても研究のねらいを『学級活動における健康教育の取り組みを主題とし、広い視野から児童の健康生活を考えること』として、本校の研究部会と上高井特別活動研究委員会とで研究を進めてきました。

研究テーマは、『自分の健康に関心をもち、自ら課題をもつて健康にいい習慣をつくっていく』とする子どもを育てる指導はどうあつたらよいかと設定し、三つの研究の視点、①自ら研究についての課題を見つけるための支援

②課題追究のための支援  
③課題解決に向けた実践化、習慣化のための支援から、仮説を決めだし、実証授業を通して研究を重ねてきました。

実証授業は、5年仁組で『おやつを取り方を考えよう』の題材で、松本小百合教諭と北村信子養護教諭との連携(T・T指導)で行われました。

研究会では、おやつの中の脂肪摂取と体への影響について考えさせたことの課題設定

○音に対して気持ちをはたらかせている子

○教材研究として、つきたい力と、その楽曲との適合性を見極めること

これらの成果と課題を来年度の研究につなげた。

仁礼小学校

石黒

薫

トーミングについて等の問題が出され熱心な意見交換がなされました。講師の県保健厚生課指導主事、武居力先生からは、健康教育の充実が求められている現状や学校教育での健康教育の取り扱い方について、また、本時については、自己の取り組みべき課題設定のあり方と題材設定について、養護教諭との連携のあり方について等、たくさんのご指導をいただきました。さらに研究の方向、内容についてもご示唆をいただきました。

研究の成果としては、子ども達の視覚に訴える資料(ワークシート、具体物、読みとりやすい表など)提示が、問題意識や追究意欲を高めていくことに有効であること、また、養護教諭の具体物を使っての説明や課題追究場面での子ども達の考えを大事にしなが臨機応変に説明を加えていったことが、子ども達がより具体的に問題を捉えることに効果的であったこと等が示されました。また、研究全体を通して、健康教育の力キユラムが作成できたことや家庭への啓発も様々な形で少しずつ始められたことも成果でありました。

本年度の成果に立って、次年度以降のエイズ教育の研究

小学校からの夢であった念願の教師：二年間の講師の時代も含め、厳しさと喜びのある世界だということを感じています。

初めて担任を持ち、うまくいかないことも山積みでした。その度に反省↓実践↓反省の繰り返し。力のなさを感じる日々。そんな授業や生活の中でも、子どもたちは懸命に取り組んでいました。「困った時、壁にぶつかった時は、何か学び成長しないさ」子どもにそう言われているようで、自分もがんばっていかねければならない、そんな氣力を奮い起こす養分をたくさんもらいました。「何か子どもの育ちに還元できるものはないか」今は、そんなことを考えながら日々過ごしています。

## 一年目の歩み

豊洲小学校 中島 洋

子どもに恵まれた、ただではありません。人に恵まれ、地域に恵まれたことが、ただ歩いていただけの私に教師としての大きな翼を与えてくれました。そう思うと、子どもや親・先輩や同僚の先生方・地域の方々に感謝の気持ちでいっぱいになります。それゆえに、「自分の人生の中でも最も充実した、やりがいのある一年間だった。」今年度を振り返りかえるとそんなことを実感します。

○私が学んだこと

〈生徒指導から二つ〉

①教師の言葉一つで子どもは変わっていく。

②子どもは常にシグナルを送っている。

子どものどういう所を伸ばしたいのか、どんな力を育てたいのか教師が持つていて、言葉がけの質も変わってきます。そのためには、子ども一人一人をよく見ていかなければなりません。

〈授業にかかわって三つ〉

①願いのある活動を仕組む。

②つくれる力をきちんと持つて授業に臨む。

③題材を工夫する。「何で」学ばせるのか。

願いのある活動は、子どもたちの取り組みの質も違いました。また、題材(地域素材など)を工夫し、授業に活かすことも大切だと感じています。子どもの願いとつけた力が合致する時に、中身の濃い授業になった気がします。





## 日々

## ～郡研を振り

## 人権同和教育

常盤中学校

五味 大仁

十一月に郡人権同和教育研究委員会の授業研究会の機会をいただきました。本校の人権同和教育研究テーマは「人権問題を自分自身の問題としてとらえさせ、解決に向けての意欲と実践力を育てるための指導はどうかあったらよいのか」として研究を進めてまいりました。

今年度は郡研の他に六月には常盤中学校区四校人権同和教育研究会での公開授業の機会もいただきました。「心の弱さ」に焦点を当てて研究を深めてきました。昨年度までの研究や六月の研究会から「心の弱さ」を次の二点ととらえています。「一『みんなやっつけているから』『差別的輪に加わらないと自分が差別されるのではないか』という意識が原動力

## 保健

相森中学校

波多 礼子

本年度の保健研究委員会は相森中において性教育の公開授業がおこなわれました。

授業者の北垣内博教諭が保健体育科ということもあり、学級担任の教科性を多く生かした授業展開でした。私だけかもしれませんが、今まであまり性教育では見られなかった形態の授業で、また新指導要領に沿って、体育科の「体ほぐし」を取り入れ、教室ではな

く体育館で行う性教育、そして「触れて、感じる命」をキーワードに進めていきました。「触れて、感じる命」というものを考えた末にたどり着いたものは、生徒同士の「ふれあい」を感じる「体ほぐし」の活動と、中学生の生活の中ではあまり機会がないと思われる、生徒に身近な存在である、現在育休中である本校の浅沼養護教諭の生まれたばかりのお

のあり方や課題追究場面での話し合いの手法、ブレインス

力になって差別に加担する『心の弱さ』」「二『いじめられる側にも原因がある』』ということを経由にいじめ・差別を正当化してしまう『心の弱さ』六月は一方に焦点を当て、それに気づかせ乗り越えさせる研究を進めてきましたが、二のことにしても生徒にとり取り上げなければ、いじめ・差別をなくすための指導が不十分ではないかという課題が見えてきました。

そこで、本時の主眼を「いじめを正当化してしまうという弱さを持った生徒たちが、資料『テニスコート』後半の話を読んで、陽子さん（主人公）の気持ちについて考える場面、アケミさんの切ない心情やそれに気づいてハッとした陽子さんの気持ちに共感することを通して、自分の心に潜む弱さや差別心に気づき、子どもを『触れる命』として登場していただきました。生徒たちの反応は私が思った以上の反応があり、日頃乳幼児に触れる体験があまりない生徒たちにとって、見て、触れ、抱く事で、夫々に『命』を感じていたようでした。

それを乗り越えようとする実践意欲を高める」として実践授業を仕組みました。研究会では、生徒たちは一時間の授業の中でよく考えていたが、主人公と自分を重ね合わせるものがなかなかうまくできず、人にごとく終わってしまったという意見が出ました。また、相手の立場に立つための視点として資料活用の仕方、発問の仕方などの課題も見えてきました。

郡研での成果や課題を今後の生徒の様子や普段の我々の指導により、さらにあらゆる差別を自分自身の問題としてとらえさせ、「心の弱さ」についてさらに研究を深めていきたいと思っています。このような機会をいただき、研究委員会の先生方をはじめ、多くの方々に感謝申し上げます。

このような形の性教育もあるということことを学びました。また養護教諭はその立場から健康教育にどのようにして学級担任と関わり進めていくか等々、未熟者の私にとって小委員会でも沢山の事を学ばせて頂きました。

今年度の郡研を終え、この一年間の郡研で終わらせてしまふことなく、次年度に向けて継続的、更に現代の社会問題に合った性教育、健康教育に全校生徒、保護者と共に取り組んでいけたらと願っています。

## 本校の宝④

## 「須坂小のシンボル」

須坂小学校

須坂小学校から道を隔ててすぐ東側に、小高くずんぐりと、とても優しい表情をした鎌田山（子どもたちはかんたやまと言う）があります。

一見、緩やかに見えますが、いざ登ってみると、体感傾斜角四十五度以上は、あっという間に感じるほど、かなり厳しい山でもありません。

実は、この山、以前は須坂小学校の子どもたちの遊び場として多くの子どもたちが日常的に登っていたのですが、近頃では、登る姿がほとんど見られなくなっていました。

その理由は、頂上へ登っても、生い茂った木々の枝に邪魔され、全くとっていいほど眺望がきかず、登ったという爽快感が得られなかったからです。

そこで、PTAではこの山を何とか子どもたちの生活や教育活動に位置づけようと、今年度から、無駄な木々の伐採と枝払いを行って頂きました。

その結果、山頂からの眺望が百三十度くらい開け、須坂市内はもちろん北信五岳まで一望できるようになりました。

学校では、早速『登ろうかんたっ子』と名付け、①体力づくり ②肥満対策

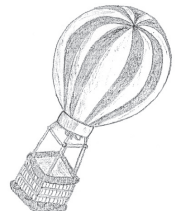
③情操教育 ④地域学習等々のねらいを含めた教育活動の一環として、かんた山へ日常的に登ることを位置づけました。



頂上から我が町を背景に一週間を曜日によって学年別に分け、自分の登ったチェックポイントにより、カードに記録していきます。総合的な学習で、かんた山の植物を調べたり、当初いやがっていた児童が、「登ったら私のうちが見えてとても景色が良かった」と、日記に書いてくるとか、「休日に親子で登ってみた」と、喜んで話される保護者の方の声を耳にし、とても嬉しく思います。

このように、着実に本校に位置付けはじめたかんた山を、これからも、本校の大切な宝として、大事に利用していきたいと考えています。（甲田 圭吾）

# 火ばち談義



小山小 新山亜希子

## 冬の雷

### 名取 健志

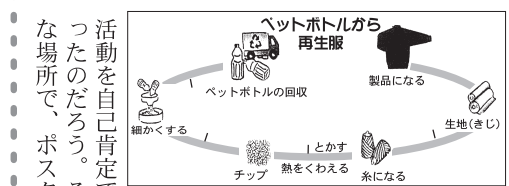
初冬の金沢。「弁当忘れても、傘忘れるな」って言うくらいだから、きつと雨か雪かな。日本海側って冬暗い。そこがまた好きなんだけど。ところがすごくいい天気。青空。そして夜。飲みに出るか。「何か雨の匂いがするぞ。」雨が降る前の空気の匂いかわりますか。そして、いきなり「ゴロゴロ」「えっ、冬に雷」そして、雨。これが雪おろしってやつか。居酒屋で一人。ちよつと一杯。旅はいいねえ。カウンターの向こうでおでんが湯気をたて、その湯気は上の黒光りしている梁まで上っていた。足が不自由だが、姿勢よく物腰の柔らかな白髪頭の店の主人が深々と「いらっしやいませ」と頭を下げた。今金沢にいるんだって、そのしぐさで実感できた。カウンターの隣の隣に座っている恰幅の良いおじいさんは毛糸の帽子をかぶり焼酎のお湯割りに梅干をいれ、鯨の生肉をかじりながらちびちびと。常連さんなのかおじいさんが何も言わなくても威勢の良いおかみさんがお酒のおかわりを出

していた。サラリーマン仲間・出張先の男と女・ほんの数分で出て行った家路を急ぐ老夫婦・たばこスパスパ派手派手娘と父・母は「東京と比べて味が薄いわね」とつぶやいた。カウンターの向こうには丸顔でめがねの中年の女性と男性。そこへ一人の男が暖簾をくぐって二人の横に座った。おかみさんが「おかえり」と一言声をかけた。店にはいろんな人がいて。僕は鱈の生の白子を初体験。おでんに茶飯。ほろ酔い気分です。駅に出た。駅にはいろんな人がいて。広いホールを行き交う人たち。携帯片手の女子高生・旅行者・出張中のサラリーマン・若いカップル。様々な人が通り過ぎていく。ふと、その人ごみの中の向こうの待合室に目をやると動と静。そこはまるで時間が止まっているよう。静かな空気が漂っていた。眠る顔。疲れた顔。物思いにふける顔。自動ドアをはさんでほんの数メートルの空間がまるで別空間に感じられた。駅には人の人生が凝縮されている。次はどこに行こうかな。(栗力丘小)

## 地域の中で育つ子ども

### 古畑 祐二

地域のごみ拾い活動をきっかけにスタートした総合的な学習の時間『クリーン&リサイクル大作戦』を合い言葉に活動を行ってきた。その活動を支えてくれたのは地域の方々の温かい言葉であった。Y児は、地域のごみ拾いをしてみて、ペットボトルが多く落ちていることが心に引つかかっていた。ペットボトルは、リサイクルできる物であるということを知っていたからだ。そこで、Y児は、ペットボトルのリサイクルについて調査し、それをポスターに



活動を自己肯定できた瞬間だったのだろう。その後、様々な場所で、ポスター掲示のおもががんばれよ！」と声をかけられた時だ。「ありがたうございます。よろしく願います。」と、ポスターを渡し、大きな声であいさつをする。溢れんばかりの笑みでガッツポーズしながら学校へと急いだY児。地域の方々の温かい言葉によって、自分の活動が自己肯定できた瞬間だったのだろう。その後、様々な場所で、ポスター掲示のおも

## 唯

### 山崎 茂

私は、その場に座り(あるいは寝そべり)、唯空を見たり、海の音を聞き入ったりするのが好きだ。なんだかよくわからないけど、気持ちがいい。ゆつたりとして、様々なことを思索することができからだ。中学2年生の時の燕登山では、夜更けに、懐中電灯を手に、唯一歩一歩、前を歩く友の足に導かれながら登山した。そして、頂上でやはり、寝そべり、通り過ぎる白い雲を、時を忘れて見ていたのを覚えている。大学生になり、信州から東京に出て生活する機会を与えられた。私にとっては、異文化理解だったような気がする。あの頃、流行った「さだまさし」

の歌は、骨身にしみた。「金よこせの一言でもいい……」私にとっては、なんとも含蓄のある歌詞であった。この時期、一人で様々なことを考えた。「死」についても考えたし、「恋愛」というものについても、深く向き合った時であった。夏の夕暮れ、これまた歌詞の文句ではないけれど、「三畳一間の小さな下宿」ひぐらしの鳴く声を聞き入ったことがあった。今でも、蝉の声を聞くと、あの風景が思い出されてくる。その時に、こんな詩を作った。「夕暮れにカナカナと鳴く(泣く)蝉の声。あなたを慕う。我が声に似て……教師になつて、生徒とともに、

奈良・京都を訪れる機会が多くなった。この地で、唯寝そべり、じつと見ていたい場所がふたつある。ひとつは、東大寺の大仏殿で、もうひとつは、甘樫丘である。霞がかつた桜や木々の色とともに、万葉の里が一望できるのだ。今、私には、二人の娘と一人の妻がいる。海には、年に数回行くことがある。いつかはアルプスや奈良・京都にも、一緒に行つてみたいと思っている。そして、みんなで、唯寝そべるのだ。しかし、同じ時と場にも、ひとりひとり感じ方や思いは違うのだろう。それがなんと不思議である。でも、その不思議さを、大切にできる人間に、私は、唯なりたいと思う。(高山中)

## 編集後記



日々、少しずつ春の気配を感じつつも卒業シーズンを間近に控え、忙しい日々を送られていると思いますが、健康に気をつけてお仕事に励んでください。さて、今回の教育会報は「日々研鑽」ということで、郡研の成果を中心に編集させていた、いただきました。今年度最後の教育会報になりましたが、この一年間、ご多用の中、原稿をお寄せいただいた先生方、どうもありがとうございました。来年度も実り多い年になりますように。(担当 栗田・新山)